

障害者に対する職業能力開発

—幅広い職種に対応できる職業能力開発への取り組み—

静岡県立あしたか職業訓練校 訓練課 生産・サービス科 鳥居 奨

1. はじめに

平成15年度の従業員規模5人以上の事業所に雇用されている知的障害者数の調査では、11万4,000人となっており、平成10年度調査時と比較すると、62.9%も増加している。産業別の雇用状況では、製造業が35.3%、卸売・小売業、飲食店・宿泊業が32.4%、サービス業が29.6%となっている。かつては知的障害者の雇用は製造業が大半であったが、この調査からもわかるように、知的障害者の雇用が多岐にわたっている。

本校では、製造業やサービス業等の幅広いニーズに対応した訓練を行ってきたが、近年、入校生の能力差が大きくなり、1年間同じコースだけで訓練をすることが難しくなってきた。また訓練生が若年者のため、本人が通勤できる範囲で就職をしようとしても、職種が限定されており就職は難しく、入校時のコースの訓練内容だけでは、どうしても無理が出てくるのが現状である。

このような雇用状況から、今年度より本校においては知的障害者の職業訓練を、生産・サービス科と名称変更し、機械操作コース、加工組立コース、アパレル・流通コースの3コースに分けた。訓練生の就職状況に応じては、訓練内容を変更したり年度途中でもコースを変更できるようにしている。また、修了生の中に人間関係が構築できなくて離職したケースがあったため、その改善にも取り組んだ。

ここ数年本校が修了生の追跡調査等により得た情

報から、新たに始めた訓練への取り組みを述べ、今後さらにどのような方向へ改善していくべきかを記述した。

2. コミュニケーション能力を高める

就業するうえで必要なことの1つとして、コミュニケーションがとれるということがあげられる。知的障害者の場合、言語発達が健常者に比べて遅く、コミュニケーションをとることを苦手とする者が多い。コミュニケーションがとれなければ、作業の開始や終了、何らかの異常が発生したときなど、他の従業員との意思の疎通ができない。訓練校であれば失敗で済むことも、企業ではコミュニケーションが原因で大きな損失を出してしまうことも考えられる。このことは、修了生の追跡調査をしたときにも企業側からよく言われることである。

そこで本校では、平成15年度より外部講師によるコミュニケーション実習を実施している（写真1、2）。訓練内容は以下のとおりである。

- (1) 自己紹介の仕方
- (2) あいさつとお辞儀
- (3) 訓練生と社会人の違い
- (4) 職場のコミュニケーション
- (5) 言葉遣い（尊敬語と謙譲語）
- (6) 面接テスト

コミュニケーション実習には、個人発表とグループ発表がある。個人発表は、配布資料に自分が話す



写真1 コミュニケーション実習の様子(1)

内容等を書き入れ、まとめてから訓練生の前で発表する方法、グループ発表は、グループの仲間で議題に対し意見を出し合い討議し、まとめてから訓練生の前で代表者が発表する方法を取っている。実習の中において、戸惑っているようなときは講師がアドバイスしている。コミュニケーション実習を始めて間もないころは、訓練生の中には下を向いたり、黙って口を閉ざしてしまう訓練生が出てきてしまった。このような訓練生には空き時間等に声をかけたり、個々に課題を与え、人の前で話をさせる機会を多く作った。これらのことを繰り返し指導していくうちに、訓練生は入校当初よりも表情や話す声の大きさが格段に変わり、コミュニケーション講座を楽しみにしている訓練生も出てきた。

すべての訓練生に対してほぼ完璧にマスターさせることは難しいが、この実習を通して少なくとも自分の言葉ではっきりと話させ、相手に正しく自分の意思を伝えることができるようにすることが今後の課題である。

3. 数に強くなる

食料品製造業では、材料の計量が重要視された製品が作られている。部品加工業では指示寸法の製品が作られている。このように製造現場では材料の計量、寸法や在庫管理、出荷作業など、数字を扱うことを要求されている。

しかしながら、本校の訓練生の中には数字に弱い者が大変多いために、生産・サービス科は、一昨年



写真2 コミュニケーション実習の様子(2)

度の途中よりから百ます計算を毎日行うようにした。このなかで、試験的に2週間同じ問題を繰り返し行ったら、飛躍的に計算時間が短縮し正解率も向上した。この効果は、脳の前頭前野を最大で25%も活性化させるということである。百ます計算の足し算について3名抜粋した結果が図1である。この結果からわかるように、最大で1回目のときに掛かった時間のほぼ半分までできるようになっているのがわかる。

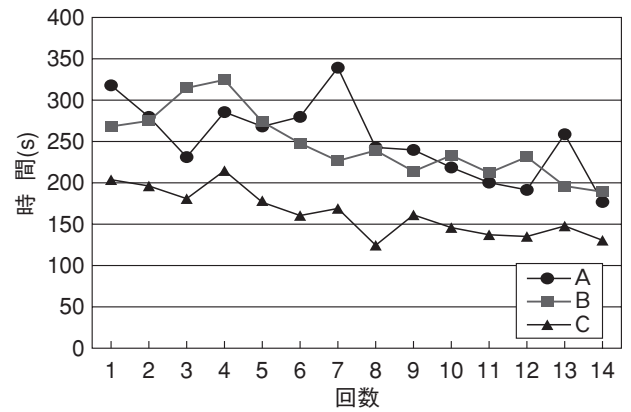


図1 百ます計算の結果

もう1つの方法として、算数の問題集を訓練生全員に渡し勉強している。

訓練生の能力は個々によって差があるため、4月当初算数の学力検査を行い、検査結果を参考に使用する問題集を購入する。問題集は小学2年生と3年生、週に1時間、各コースで問題集を勉強して、わからないときは指導員がわかるまで教える。その結果、本校の訓練生にみられる不得意な項目として次のようなものがあげられる。

- (1) 足し算、引き算において繰り上げ、繰り下げ

が入るとわからなくなる。

- (2) 九九をすべて覚えていない。
- (3) 割り算ができない。
- (4) 小数点が入ると計算ができなくなる。
- (5) kgからg, mmからcmなど単位の変換ができない。

上記の(1)~(3)のケースは少数であるが、(4)および(5)が特に多いように思われる。知的障害者が就職するに当たって、上記の内容を習得しておく必要がある。学力的には最低でも小学2年生、3年生のものができるようにしたい。

4. 指先訓練

どの企業でも指先の器用さは要求されるので平成15年度には各科において、指先訓練の教材を10数種類作り実施した。どのような職場においても、丁寧さと正確さとスピードが要求されており、本校の訓練生には、スピードと正確さと丁寧さを持ち備えて

いる訓練生は少ない。そこで、これらの能力を向上させるために指先訓練を行い根気強さや集中力を養っている。図2~5に抜粋した訓練生3名の指先訓練の結果を示す。この結果を見てわかることは、Cは全体的にA、Bに比べてスピードは落ちるが、訓練によってA、Bのスピードに及ばないまでも近づいているのがわかる。

訓練生は指先訓練に興味および関心を持ち、指導員が用意した課題に意欲を燃やし取り組んでいる。訓練生の中には、結果が悪かったのであれば、次回は頑張る努力しようとする心が芽生えてきた。指先訓練の利点は、上達したことを訓練生自身が判断でき、ポジティブな考え方をするようになった。本校の訓練生は、これまであまり学校で面倒をみてもらっていないので学校で勉強した教科で、好きな教科や得意な教科の有無について聞いても反応はなく、勉強嫌いかと尋ねると大半が勉強は嫌いと言ってきたので、少しは好きになるように指導員と一緒に勉強している。また、訓練も同じように努力すればで

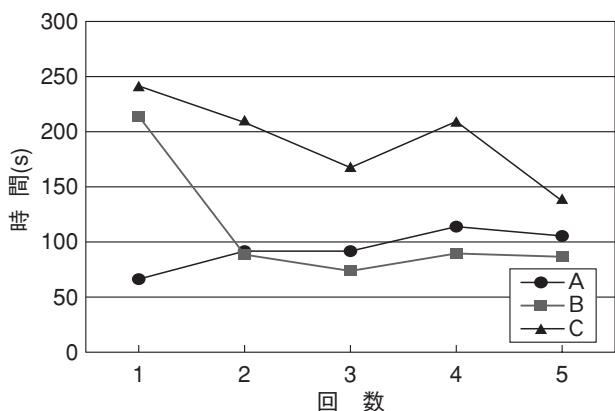


図2 指先訓練の結果 (紙を数える)

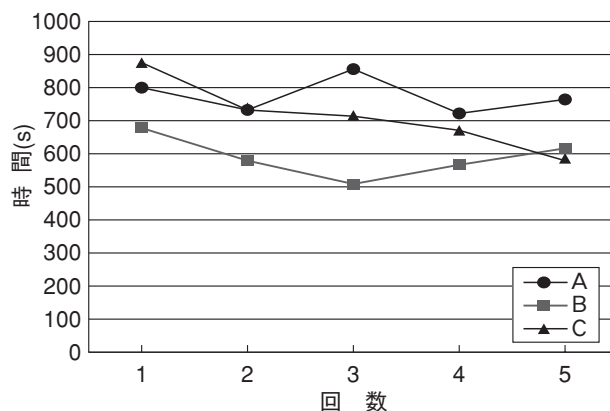


図4 指先訓練の結果 (はさみで紙を切る)

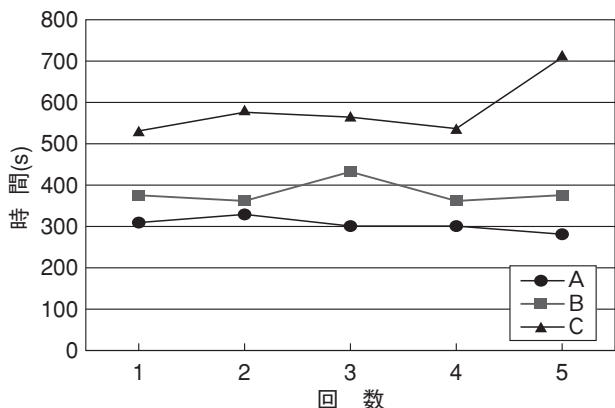


図3 指先訓練の結果 (小玉入れ)

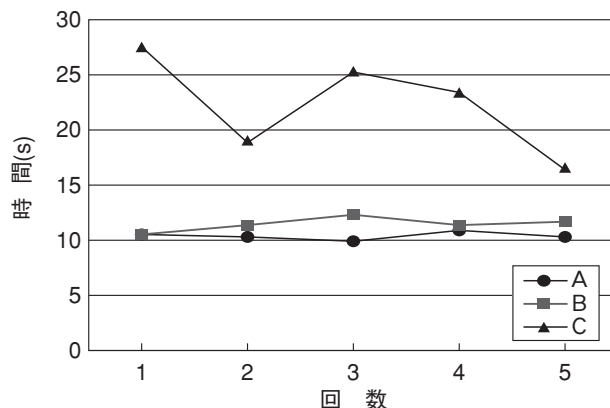


図5 指先訓練の結果 (圧着端子)

きるようになることや、頑張ることの大切をしっかりと教え込んでいる。

5. 清掃実習

表1に平成16年度生産実務科の就職状況を示す。この表から環境整備・清掃業に3名が就職していることがわかる。さらに、ほかの職種に就職した修了生も清掃の仕事に任されることが大変多い。企業訪問等でよく言われることのなかで一番多い意見として、掃除や整理整頓がしっかりできないことがあげられる。

表1 平成16年度 生産実務科の就職状況

職 種	生産実務科			合 計
	機械操作専攻	機器組立専攻	縫製加工専攻	
機械部品加工	1	1		2
電気部品加工	1			1
自動車部品加工	2	2		4
鍍金加工	1	2		3
調理補助		1		1
食品製造	1	1		2
環境整備・清掃業	2	1		3
化粧品製造			1	1
サービス業		1	5	6
合 計	8	9	6	23

このようなことから、生産・サービス科では全コースにおいて清掃実習を行っている。写真3、4に清掃実習の様子、表2に清掃実習の内容を示す。写真のように清掃用具を実際に使って扱い方を訓練し、うまく扱えない者はそのつど修正していく。訓練生によって器用だったり、不器用だったりするが、この実習を終えたときには格段に上達している。訓練生の中には、スーパーマーケットなどに買い物に行ったとき、清掃実習で教わっていることを、店員が同じようにやっているのを見て、清掃実習についての見方が変わったと、訓練生から言ってきた。実習でやっていることが実際にやられていることで、訓練生にとって励みになったのではないと思われる。



写真3 清掃実習の様子(1)



写真4 清掃実習の様子(2)

表2 清掃実習の内容

学 科	実 技
(1) ビルメンテナンス概要	(1) ほうき
(2) 建築物環境衛生法	(2) タオル
(3) 清掃の目的	(3) 水拭きモップ
(4) 作業従事者心得	(4) バキューム
(5) 作業の安全と衛生	(5) 床磨き機
	(6) ダストモップ
	(7) 文化チリ取り
	(8) 窓用スクイジー

る。

また、実際に清掃業関係に就職する者に関しては、さらに応用実習の訓練をして、就職したときに業務に入りやすいようにしている。

6. 各コースにおける訓練

機械加工では回転速度の速い機械を扱い、縫製作業は難しい操作をこなさねばならない。電気部品組

み立てなどでは、工具などを用いて作業することも多い。また、どのような仕事でも必ずスピードが求められる。そこで、どの職種においても、以下にあげることを身に付け、訓練しておく必要がある。

(1) 機械や器具の操作を確実にマスターする

① 機械等の操作

- ・スイッチやレバーにより操作ができる。
- ・作動のための数字などを入力でき、数字や目盛が読める。
- ・異常があったとき、緊急停止ボタンを押すなどの対処ができる。
- ・安全作業をするために、やってはいけないことを理解し、必要な規則を守れる。

② 器工具使用

- ・ドライバー、スパナ、ニッパ、ハンダゴテなど使用する器工具の名前や使い方を習得する。
- ・工具の手入れや調整ができる。

③ 計測器、計量器使用

- ・スケールやノギスなどの計測器が使える。
- ・その他、計量器などが使える。

(2) 仕事をスムーズにこなす

① 集中力と持続性

- ・人の出入りや物音に気を取られず作業できる。
- ・単調な作業でも30分から1時間くらいは集中して作業できる。

② 時間の管理

- ・時計を読むことができ、残り時間などの計算ができる。
- ・ノルマと時間の制約を関連づけられる

③ 体力を養う

- ・一定の作業姿勢を、1時間くらいは取り続けることができる。
- ・上手に体を使い、重いものなどを運ぶことができる。

(3) その他

① 身だしなみ

- ・爪や髪、髭など、毎日清潔にできる。

- ・作業服、安全靴、帽子などしっかり着用でき、乱れていれば自分で気が付き直すことができる。

② 労働習慣

- ・規則正しい生活を心がけ、疲労回復をできる。
- ・服薬管理など自己の健康管理ができる。

7. 今後の改善点

これまでいろいろと述べてきましたが、まだまだ改善しなければならない箇所がたくさんありますが、これからも継続して頑張っていきたい。

コミュニケーション実習では、人前で話すことが苦手な訓練生を人前でも堂々と話すことができるようにすることが目的である。このことから、少人数制で実習した方法がより効果が上がると思う。また、テキストの中には、一般の人達にとっては当たり前前に理解されている言葉遣いでも、知的障害者には理解できない言葉遣いが多く使われ書かれている。このようなテキストは使用できないので、知的障害者が使用できるテキストを製作中である。

百ます計算では、毎日続ければ続けるほど間違いなく上達した。しかし、百ます計算の苦手な訓練生にとっては大変苦痛な時間になっているが、会社では簡単な計算を短時間でやることが多くあり、苦手の原因をしっかりと指導員が把握して、このことについて、しっかりと覚えさせ、計算できるようにしていかないと、前に向かって進むことはできない。そのためにも、訓練生自身が自信をなくし無気力にならないように注意しながら指導している今日である。できる訓練生に対しては、能力別に分け一斉にやらせており、競争意識を持たせることにより頑張る力がついてきた。

指先訓練においても、スピードや正確性を訓練するうえで有効である。しかし、能力のある訓練生にとってはやさしい課題であるとマンネリ化しやすいので、たくさんの課題を作り充実させていくことにした。また、現在各コースごとに別れて実施しているが、月に1回程度全コース一斉に実施すれば、訓練生にとって励みになると思われる。

清掃実習においては、実習内容等に問題は起きて

いないが、指導員1人で10人の訓練生を実習させることは難しい。その理由は、訓練生の動きに眼が届かない。そのためには、補助の指導員が数人必ずつく必要がある。

最後に本校で理想と考えられる訓練体系を私なりに考え、図にしてみた(図6)。本校は現段階では、各コース別々に訓練している。しかし、冒頭でも述べたように、入校生の能力低下の差が大きくなってきたことから、1年間同じコースで訓練をすることが難しくなってきた。また、就職も同じように入ったコースと関連ある仕事に就くとは限らない。例えば、機械操作コースに入って就職が組立関係であった場合、訓練効果は最大限に生かせない。

そこで図6のように、4月～9月にすべての訓練生に全コースの訓練を受けさせ、その中でコミュニケーション実習や算数などの訓練はすでに述べたような方法で行う。就職活動が活発化する10月～1月には企業と連携を取りながら企業実習を進め、企業実習をして足りない部分は関連コースに戻って訓練をし、再び企業実習に出すというような方法が望ましいと考える。

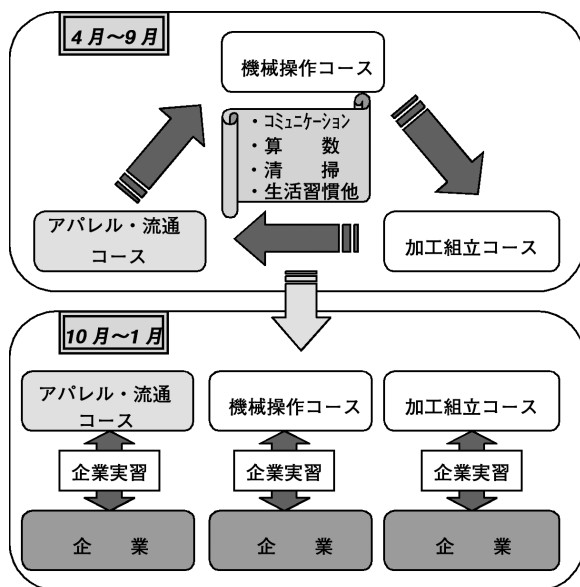


図6 理想とされる訓練体系

8. まとめ

今日の知的障害者に対する雇用率はまだまだ低く、

知的障害者の人達は、健常者の人達と一緒に働き喜びを分かち合いたい気持ちで一杯です。これまで知的障害者が社会参加している様子の報道は少なく、障害者に対する理解が乏しいので、障害者に対する理解と啓発のための報道をして、1人でも多く働かせていただける企業が手をあげてくれることを願います。

企業側から知的障害者を雇用しようとしても、知的障害者に対する知識を持ち合わせていないために、雇用は難しいと話されたことを思い出し、本校の修了生を雇用していただいた企業を訪問し苦勞話を聞きながら、知的障害者に対する企業側への理解のための冊子「私もがんばっています」(写真5)を作成し、知的障害者に対し理解していただくために各機関・企業に配布したところ、多くの企業より障害者雇用について偏見がなくなってきた。

訓練校では、基本的な生活習慣や企業で必要とされる作業等を身に付けさせ、企業に送り出し今後の雇用に結びつくためには、幅広い職種に対応できる訓練体制をもっとシステム化する必要がある。

今後一層、企業の求めるニーズに合った人材の育成に向けた訓練に磨きを掛けていくことを、新たな気持ちで心に誓った。



写真5 就業事例集『私もがんばっています』